

『虐待死』

2019年09月18日

2018年3月、結愛（ゆあ）ちゃんは義父から虐待され、始まったばかりの5歳の命を奪われた。彼女は「もうおねがい ゆるして ゆるしてください おねがいます ほんとうにもうおなじことはしません ゆるして」と書き残していたことが報道された。胸が張り裂けるような言葉である。どんなに悲しく、苦しい思いの中で、命を終えたことであろうか。虐待事件は、ここ20年間に3倍以上に増えている。子どもは可愛く、守るべき者という理念が薄れてきたようだ。社会的な深い病理があるのではないか。

川崎二三彦氏が『虐待死 なぜ起きるのか、どう防ぐのか』を上梓している。川崎氏は、京都大学哲学科を卒業し、児童福祉司になり、子どもの虹 情報研修センターのセンター長をしておられる。子どもの虐待死のケースを多く知っておられ、憂慮をもって、虐待死の被害を減らすための社会の責任を鋭く訴えている。

川崎氏は、虐待の歴史から書き始めている。戦前は、養育費を取って貰い子した子どもを折檻し、殺す事件は珍しくはなかった。1970年代は、嬰兒死体を遺棄する「コインロッカーベイビー事件」と言われた事件が社会的な関心を集めた。しかし、親の体罰は当然とされ、「法は家庭に入らず」の考えが強い日本では、「児童虐待」を犯罪と見ることは少なく、虐待死は社会的合意がなく、見えない事件とされていた。ところが1990年代後半、児童相談所から虐待死の報告がなされ、大きな社会問題としてクローズアップされ始めた。2014年に、厚生労働省は虐待死亡数を公表し、この頃から、児童虐待に関する専門委員会を作り、虐待の実態調査、検証、検討が本格化していった。

川崎氏は、御自分が関わった事例や調査結果などから、目を覆いたくなるような虐待死の実態を報告している。「しつけ」と称して、日常的に暴力を振るわれ、死に至った子どももいる。日本では、しつけの体罰は容認されていた。暴力は受けなかったが、雪の中に追い出され、寒さに凍えて死んだ子どももいる。全存在を否定され、「死ね」と言われ、自死した子どもがいる。少しの食料を与えられ、保護者は仕事や遊びに行き、餓死した子どももいる。育児を放棄したネグレクトである。親の精神疾患、加齢などによる子どもの虐待死がある。飽食の時代なのに、貧困が原因で餓死を生んでいる事態もある。彼らは死んでいく時、何を思っただろうかと想像すると、いたたまれない気持ちに駆られる。日本では、戦国時代から「間引き」という風習があった。水上勉の『一休』に、「間引き」の風習について書いている。生まれてきた子どもに障がいがあり、乳を与えず、殺したと、私も聞いたことがある。母親は出産に多くのリスクを負う。子育てをする気力と精神を失い、不幸な場合は心中することもある。最近、虐待事件が報道される時、家庭、学校、児童相談所、警察、病院の連絡が円滑でないことが指摘されているが、ただ、批判するだけでは、子どもを守ることはできない。川崎氏は、児童相談所の職務の過酷な状況を述べ、働き続けたと思う環境を整えることが急務であると主張している。家庭が崩壊している現実がある。また、社会が寛容を失い、多忙を強いている。手がかかる子どもの成長について行けず、保護者たちが苛立ち、命を抹殺することが多くなっている。

川崎氏は、子どもの生きる権利が尊重される文化の醸成が大切であると力説する。文化は一朝一夕に育つものではないが、過去の虐待の事例を謙虚に学び、理解を深め、次に生かされるような社会環境を整え、支援できる状況を作り出すことを訴えている。誰よりも虐待の現場を知る川崎氏は「微力だけど無力じゃない」と締めくくっている。